

第 88 回 関西スペイン語教授法ワークショップ (TADESKA) 例会

開催日：2015 年 5 月 9 日

開催場所：関西学院大学梅田キャンパス(ハブスクエア) 1004 教室

「日本の大学におけるスペイン語教育の制度的条件と環境(2)」

担当者：横山友里

言語：日本語

内容：

本ワークショップ発表は、今年度の共通テーマである、高等教育の枠組みで行われるスペイン語教育の制度的条件を捉えなおすことで、理解を深め、日本のスペイン語教育を客観的に把握する「日本の大学におけるスペイン語教育の制度的条件と環境」の第 2 回目である。具体的には①勤務校の制度的条件と環境、②これら制度的条件と環境から見えてくるもの、③非専攻としてのスペイン語教育、④学生が非専攻の外国語科目授業に求めるもの、⑤結論、について発表を行った。

①について、勤務校の担当授業における科目の制度的条件、履修方法、科目設置目的などが報告された。②については、これらの条件がどのように学習に影響を与えているかを分析した。また、学習者側の視点から、この担当科目（非専攻としてのスペイン語）がどのように捉えられているかを分析するため、③において、学習者自身の専門科目学習時と、非専攻としてスペイン語を学習する際の動機の違いを、自己決定理論や職業・専門性の視点から分析を行った。非専攻学習時では、動機は低い、ある程度主体性を持って学習すること、スペイン語を学習しても将来に役立つことが少ないと生徒自身を感じていることが分かった。④では、担当者が独自に行っている授業アンケートから、学生が非専攻の授業に求めているものを分析した。学生は、授業において「楽しい」、「分かるという体験」、「実際に使える」という経験を求めていることが分かった。⑤の結論においては、非専攻としてのスペイン語教育において、教育を提供する我々教師側と学習者である生徒側に、授業に対する姿勢、動機、条件などに不均等が生じていることが分かった。これらを改善し、より動機づけを高めるためには、スペイン語を学習した後の将来で使える具体例の提示の必要性や、「分かる」から「楽しい」、そして「実際に使える」という経験を授業内で行っていく必要性が示された。

次にこの発表を踏まえ、参加者で討論を行った。最初に、各自の教師経験から、スペイン語を学習する将来に直結するメリットが話し合われた。現在の中南米の市場（商社、メキシコやボリビア、チリなどでのビジネスの機会）、英語以外の多言語の使用による多文化理解や多文化共生、アメリカにおけるスペイン語使用の例などが共有された。次に、学生の積極的な学習を促進する教師側の努力の成功例が話し合われた。大学のプログラムにより留学に行った生徒の、語学力以外の人間性や人生経験としての向上、授業における「楽しい」という体験による生徒の頑張り、生徒を観察してほめることによる生徒の頑張り、またアクティブ・ラーニング（例：グループ学習、生徒に先生役をさせる）による授業などの例が共有された。またスペインにおいては、教師による一方的な授業の展開よりは、生徒自身の積極的な質問等による授業参加により、双方向的な授業が展開されるという文化の違いも明らかになった。アクティブ・ラーニングについての不安点なども今回の討論で出たため、最後に担当者より、東京大学の無料オンライン講座「インタラクティブ・ティーチング」(https://lms.gacco.org/courses/re_gacco/ga017/2015_06/about) が紹介された。

(報告者：横山友里)